群馬県立中央中等教育学校英語科
SELHi 主任　津久井貴之

『自己表現力を高め，自ら英語を学び続ける生徒の育成』

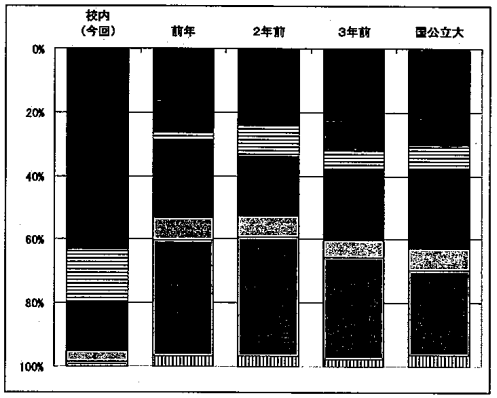
～カリキュラム開発と英語学習の本質に迫る授業の展開を通して～

1　生徒の実態

英語学習への意識の高さ	・学習方法の追究、英語学習に対するプラスのイメージ ・学習時間の確保（３年時で平日４０分、休日１時間３０分）
英語学習への自主的な取組	・自主学習ノートによる家庭学習、テストの復習 ・英検など各種検定試験の積極的な受験
実践的なコミュニケーション能力の高まり	・「国際理解」でのネイティブとの英会話 ・日記や意見文、学習や部活動の悩みを打ち明けた英作文

(1)　生徒の学習の方法・スタイル

- →宿題・予習
- →宿題・復習
- →宿題・予習・復習
- →宿題・予習・復習・<u>自主学習</u>
- →宿題・試験前学習のみ
- →試験前学習のみ
- →塾での学習
- →何もしない



(2)　英語検定取得状況

学　年	5級	4級	3級	準2級	2級	3級以上の取得率	準2・2級以上の取得率
4　年	0	0	13	83	31	１００%	８９．８%
3　年	5	25	59	25	5	６９%	２３．３%
2　年	18	65	29	4	0	３０%	３．１%
1　年	2	7	1	0	0	０．８%	０%
全　体	25	97	102	112	36	４９%	２９%

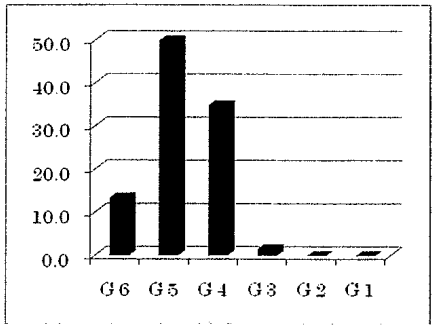
(3)　GTEC for Students の状況

①　スコアの推移（第４学年の平均スコア）

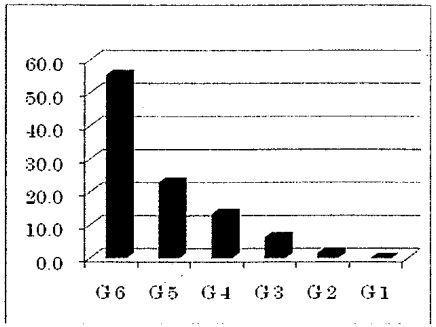
項　目	3年時冬(Basic)	4年春(Advanced)	Grade (Grade 6の人数)
Total	５１９	５６８	最高スコア 723
Reading	１８８	２０１	Grade 5 (Grade 6=17)
Listening	１９８	２２５	Grade 6(Grade 6=70)
Writing	１３３	１４２	Grade 5(Grade 6=3)

②　各グレードの分布状況（※　数字は%）

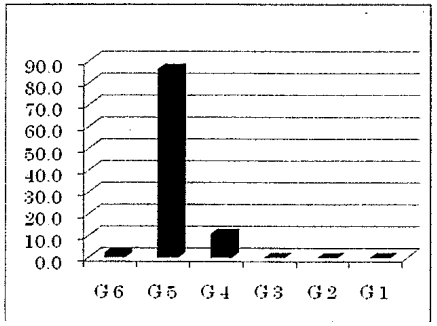
Reading



Listening



Writing



(4)　生徒の実態・カリキュラム等からの課題

①　英語学習への興味・関心が次第に薄れ，英語ができないことへのプレッシャーや不安を感じたり，自己の英語学習の取組を過小評価したりする生徒が出てきている。

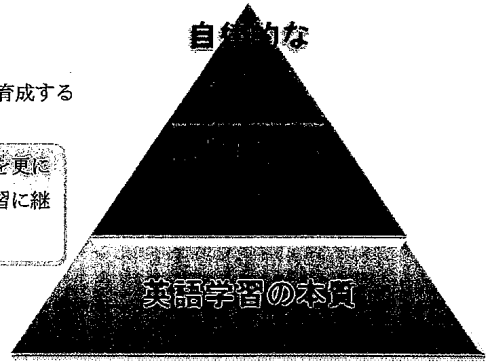
②　前期課程と後期課程の接続を円滑にし，系統的な指導や単元構想を行うことも課題であると考える。

2　SELHi 研究の構想・柱

(1)　SELHi で何を目指すのか

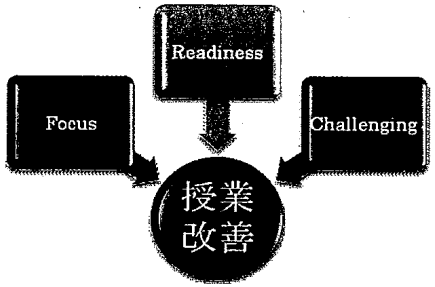
①　目指すゴール（生徒像）＝自律的な学習者を育成する

学習への興味・関心の高さや学習への積極性を更に伸ばし，自ら学習方法や内容を工夫し，英語学習に継続的・積極的に取り組める生徒



② 目指す生徒を育てる授業を創る

＝質の高い授業＝英語学習の本来の姿



Focus:ねらいを明確にした活動・授業づくり
Readiness:生徒の実態に応じた段階的な支援
Challenging:生徒の好奇心や意欲を高める単元構成

③ 中等生にとっての英語学習の本来の姿（本質）をとらえる

① 言語学習の特徴を理解し，自分に合った学習方法で継続的に行う学習
② 「伝えられた」成就感や「身に付いた」実感，「ここまでできた」達成感がもてる学習
③ コミュニケーションの楽しさや大切さを実感し，自己表現ができる学習

(2) 研究の対象となる科目や活動等

① 英語Ⅰ（本質に迫る授業づくり、シラバスの改善）
② ECOM（本質に迫る授業づくり、シラバスの改善）
③ 国際理解（シラバスの改善）
④ 家庭学習（効果的な課題の在り方、質の高い自主学習の工夫）

(3) SELHi を通して

① 生徒の英語力を検証し、効果的に高めることができる。(進路実現)
② これまでの指導方法、今後行おうとしている研究の評価・検証を行うことができる。
③ 指導方法、シラバスの改善、共有化・共通理解を図ることができる。

3 今年度（１年目）の研究 ～SELHi 研究計画書より～

○ 目標：研究開発課題の共通理解を図るとともに，充実期４年の指導内容・方法を確立させる。
○ ３本柱について：(1) 英語学習の本質に迫る授業の創造（積極的な授業公開及び授業研究会）
(2) 学校設定科目『ＥＣＯＭ』の４年次のシラバス改善と実践
(3) 総合的な学習の時間『国際理解』の４年次のシラバス改善と実践

【(1)について】

○ “FOCUS”をキーワードに、ねらいや目標を明確にした活動・授業を展開する。
○ 教科書で扱われている題材を基に、単元構成を工夫する。
○ シラバスの改善・６年間を見通し、学年・学習ステージごとの到達目標を具体的に設定する。
○ 自主学習ノートを中心とした家庭学習の支援を充実させる。

＜補助資料＞

(3) 自主的な学習習慣の確立・家庭学習への支援

本校全体の方針である**自学自習の精神**を受け、英語科では、１年次より**自主学習ノートによる学習**を基本としている。**授業の予習や復習・自主学習を行わせるような家庭学習のあり方や学習方略について指導・支援を行っている。**例えば、英語学習が苦手な生徒には、冬休みの初日に、休業中の学習の目標の設定の仕方をガイダンスしたり、生徒全員に毎日の学習の様子を記録させたり、休業後に自己評価を行わせたりしている。生徒は、１年次より使う自主学習ノートは多い生徒で１０冊以上になり、ポートフォリオとしての機能も果たしている。

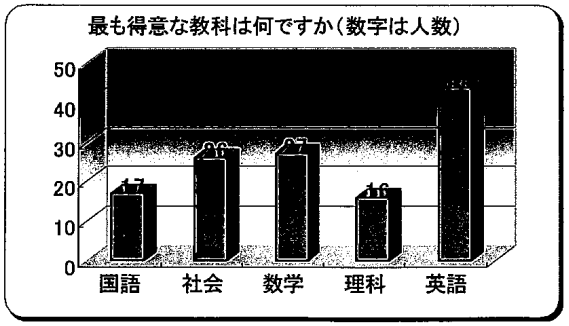
＜自主的な学習習慣に関する本校３年生のデータ ～１０月末実施 学習実態調査より＞

○ **英語の家庭学習は平日４５分、休日１時間２０分**行っている。
○ **８７．５%の生徒は、宿題・予習・復習・自主学習を家庭学習で行っている。**
（その他は、「宿題と試験前の学習、塾での学習中心」。「試験前の学習のみ」は０%。）
○ **２３．４%の生徒は、予習として音読**を行っている。(全国の中高一貫の３年生の約４倍)

(4) 学習意欲を高める指導の工夫

自主的な学習を進める上で、学習の仕方の指導とともに欠かせないのは、生徒の英語学習に対する意欲の伸長である。本校英語科では、**トップダウン方式で、４月の段階で１年の最後の目標を示し、生徒も教師もその目標の達成を意識して英語の学習や指導に取り組んでいる。**例えば、３年生では、「３～５分程度で、原稿を見ずに偉人を英語で紹介することができる」や、「ルワンダの大虐殺に関する映画を鑑賞し、インパクトのある映画の推薦文を作成することができる」などが目標であり、生徒は、目的をもって学習を進めている。また、**生徒向けシラバスには、その単元でおさえるべき内容を家庭学習も含めて明示**している。「この単元で、これだけはできるようになった」という充実感や達成感を味わうことで、次の単元や英語学習全般への意欲を高めることができるよう工夫している。

＜英語学習への意識・意欲に関する本校１期生のデータ～１０月・２月実施 学習実態調査より＞

○ **８４、４%の生徒は、「英語学習がとても好きである」「まあまあ好きである」。**
○ 英語を得意だと考える生徒が多い。

★★★ **４割の生徒が英語が得意、苦手は１割以下。**